

比較言語学入門VI

日 野 資 成

0. はじめに

これまでの「比較言語学入門」のシリーズでは、世界の言語を語の歴史的変化・文法・音声・文字の観点から比較してきた。それらすべてに共通することは、実際に書いたり話したりする言語にかかわるということである。今回は、言語を使わない非言語コミュニケーションについて、さまざまな言語共同体で使われているものを比較対照してみたい。その前に、まず非言語コミュニケーションを定義しよう。非言語コミュニケーションとは「身振りや表情あるいは服装などのような言語記号以外の手段による伝達行動」である(『言語学大辞典 術語編』1054ページ)。非言語コミュニケーションの例として、ここには「身振り」「表情」「服装」が挙げられている。ほかにどのようなものがあるだろうか。『異文化コミュニケーションワークブック』(第4章「非言語コミュニケーション」80-100ページ)には、「顔の表情」、「アイコンタクト」、「ジェスチャー」、「タッチング」、「空間(対人距離, 方向)」、「時間」の使い方の6つが取り上げられている。これらのうち、最初の四つはわれわれの体を使った直接のコミュニケーションである。一方、あとの「空間」、「時間」は、体を使った直接のコミュニケーションではないが、われわれがそれらをどのように使ってコミュニケーションをするのかという点で、やはりコミュニケーションに密接にかかわるので取り上げて検討する。また、「服装」はわれわれの体そのものではなく、われわれが身に着けるものであるが、それによって何らかの発信をする、つまりコミュニケーションをしていると考えられるので、最後に取り上げて検討したい。それぞれの項目については、いくつかの言語共同体の例を取り上げて論じる。

言語によるコミュニケーションによる量と非言語コミュニケーションによ

る量の割合は、諸説あるが、30%対70%くらいだという（藤本 1998）。したがって、非言語コミュニケーションは言語によるコミュニケーションを助けるだけでなく、人間のコミュニケーションにとって必要不可欠な要素であるといえる。また、非言語コミュニケーションの中でも特にジェスチャーは、異なる文化圏において、全く異なる意味を持つ場合があり、誤解を生むものになっているので、注意を要する。では、顔の表情から順番に見ていこう。

1 顔の表情

喜怒哀楽の情を表す顔の表情は、一般的に欧米人は豊かで、日本人は乏しいといわれる。日本人は表情があいまいで、何を考えているのかわかりにくい、という指摘がしばしば欧米人によってなされている。筆者もアメリカに留学して間もないころは、アメリカ人のジェスチャーのオーバーさと表情の豊かさに圧倒されたことがある。なぜこのような違いが現れるのだろうか。

日本は周囲を海に囲まれた島国で、「互いに理解できる情報に満ち溢れた」High Context（高文脈）の国であるのに対し、欧米はさまざまな異なる人種と接する機会が多く、「互いに理解できる情報が少ない」Low Context（低文脈）の国々が多いという指摘があるが（藤本 1998：98ページ）、日本では、相手は何者であるか、わかっているのだから、互いに意思疎通するのに、表情を豊かにする必要もないし、ジェスチャーをオーバーにする必要もない。一方欧米では、異なる言語共同体同士が隣接し合い、言葉も通じず、相手は何者であるかもわからないので、顔の表情もジェスチャーもオーバーにしてコミュニケーションする必要があったのである。『異文化理解とコミュニケーション』（17ページ）では、「日本、アラブ諸国、ギリシャその他の国々のコミュニケーションは著しい高文脈型、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、英語などのゲルマン語系の国々のコミュニケーションは著しい低文脈型である」と指摘している。

違いが現れるもう一つの原因は、民族の相違である。日本は元来農耕民族で、「定住して集落を作り、隣近所とは永久に交際することになる。従って、農作物に対するような細心の注意を払って、隣人に対しても応対しなければ

ならない。喜怒哀楽の感情をあまり激しく表現することなく、自己主張を控え、人間関係に和を作ろうとする」(藤本：99ページ)。一方欧米民族は元来遊牧民で、常に移動し、「厳しい環境の中で、激しい労働を強いられ、自然に喜怒哀楽の表現が激しくなり、仲間との対話にもはっきり自己を主張し、個性的な明解な表現をしなければ相手に通じない」(同ページ)。

日米の顔の表情の違いを『日米ボディートーク』の中から具体的に挙げよう。まず、鼻にしわを寄せる表情はアメリカでは子供も大人も使い、嫌悪を表す。日本人は多少鼻にしわを寄せる程度で、アメリカ人ほど表情がはっきりしていない(286-287ページ)。眼球をぐるりと回す動作はアメリカでは「あきれた」「やれやれ」の意味を表すが、日本人はそのような動作はしない(171-172ページ)。両目を見開く動作はアメリカでは怒りや驚きを表す。日本人もしないわけではないが、アメリカ人ほど大きく見開いたりしない。また、使用頻度も多くはない(173-175ページ)。また、『ボディートーク 世界の身振り辞典』によれば、共謀を表すウィンクは西欧社会では広範囲に普及しているが日本では一般的ではない(51ページ)。また、挨拶を表す両眉瞬き(両眉を短い時間にすばやく一回上下させる)も世界各地で見られるが(52-53ページ)、日本にはない。

顔の表情は一般に、①喜び、②悲しみ、③怒り、④恐怖、⑤嫌悪、⑥侮辱、⑦驚き、⑧当惑、⑨興味、⑩決意の10の基本的なカテゴリーに識別される(『異文化理解とコミュニケーション』256ページ)。しかし、Just Talk (2005)によれば、アメリカ人の顔の表情は以下のように漫画で描かれており、全部で18ほどある。

図1 アメリカ人の顔の表情



これはアメリカ人の顔の表情の豊かさを物語っている。

2 アイコンタクト

日本人は相手と話をするとき、目をそらす傾向にある。一方欧米人は、相手の目を見て話す。これは、日本人と欧米人で、アイコンタクトの意味・機能が異なるためである。『しぐさの比較文化』によれば、「目の接触が全然またはほんの少ししかないとき、英国国民は普通は不誠実、不正直、ごまかしと解釈するが、同時にそれは内気さを示す場合もある。一方日本人の間では目の接触の欠如はむしろ丁寧さや尊敬を意味することが多く、必ずしも興味の欠如を意味しない」(216ページ)とあり、アイコンタクトは英国人にとっては「正直、信用、信頼、率直などの目安」(226ページ)であり、日本人にとっては「自己主張のためでなく素直な謙遜の表現」(同)である。また、『異文化理解とコミュニケーション』には、「アメリカ人にとって、アイコンタクトはたいせつなコミュニケーションの手段である。重要な話題であれば、話

し手は聞き手の眼をしっかりとみすえて話す。それは自分が真剣に、そして誠実にこの話題に取り組んでいることを伝達するからである。一方、聞き手も話し手から眼を離さない。話し手の意図を明確につかむためである。」とある。英国人、アメリカ人にとって、相手と話をするとき、アイコンタクトは真剣に話すために必須の積極的な要素であるが、日本人にとっては、相手の眼を見つめすぎると失礼になるという消極的な要素になっている。

そのようなアイコンタクトに対する解釈の違いから、アメリカ人同士の会話では、アイコンタクトを取り合う時間が長く、日本人同士の会話ではそれが短いことが予測できる。ここでは、日米のテレビのトークショーを取り上げ、その長さの違いを示す。英語のトークショーは、1997年12月1日に8チャンネルで放映された The Tonight Show からの一節を引用する。ホストのジェイ・レノ (J) とゲストの、ベリー・ハレ (B, プロバスケットボールのチアリーダー) の会話で、話題はクリスマスプレゼントである。会話の下の点線部分はBがJにアイコンタクトをしている部分である。Aは Audience (聴衆) の略でスタジオに来ている人たち、その他の記号は巻末を参照。

J: Now, as a kid, were you the type and you seem like sneak-a-peek
!-----

type.

----!

B: Sneak-a-peak? (laughter)

!-----!

J: You know, like, at present, did ya ever do that? (looking at B with
!-----!

his left hand toward B) Cause you *seem* like [

B: NO, no I didn't (pointing to J). But I'll *tell* ya a story (gesture).

!-----!

J: Yeah.

B: Um, (0.3) two kids (gesture), (0.2) my mother's best friend (gesture) [

!-----!

J: Yeah (small voice).

!-----!

B: She had two little kids (gesture), same age as my sister and I
(gesture), (0.1) and one Christmas, THEy snuck (gesture) and THEy

!-----!

looked (gesture) at their presents and they didn't wrap (gesture)

-----!

and *back* (0.1) up too tight (gesture).

!-----!

J: Right.

!--!

B: And their mother found out and she took (0.1) all their presents

!-----! !-----!

(gesture) back and they had NO presents (gesture) [

-----! !-----!

J: Oh, come On::n. Oh that seems like awful to ME::.

!-----! (B looks at Audience)

A: (sighing)

B: So, you know what I did (gesture). (0.2) The next year when I did it

!-----! !-----!

(gesture), I made sure I put it back *right*. (gesture, laughter)

!-----!

A: (laughter)

!-----!

J: Oh, yeah yeah yeah. Oh, yeah yeah. So, pretty soon you learned from

!-----!

the lesson.

-----!

B: I learned, you know, wrap it back *right*.

!-----!

(日本語訳)

J：子供のとき、のぞき見が好きだったんじゃない？

B：のぞき見？

J：プレゼントなんか、のぞいたことない？（Bを見て、左手をBに向ける）そう見えるよ。

B：まさか、そんなことないわよ（Jを指差す）でも、こんな話があるわ。

J：何？

B：えーと、子供が二人、お母さんの友だちにね。

J：うん。

B：お母さんの友だちに子供が二人いて、妹と私と同一年の。で、クリスマスとき、プレゼントをのぞき見したんだけど、元通りにちゃんと包まなかったの。

J：そう。

B：で、お母さんに見つかってプレゼントを全部取り上げられて、プレゼントなしになっちゃったのよ。

J：なんてこった。それはひどいよねー。（Bは客席を見る）

A：(ため息)

B：で、わたしはどうしたかっていうと。次の年のクリスマスとき、プレゼントをのぞき見したんだけど、元通りにちゃんとしまったわ（笑い）

A：(笑い)

J：うん、うんうん、うん。人の失敗で勉強したわけだ。

B：ちゃんともとどおりに包むことをね。

BはJにかなり長い時間アイコンタクトを取っていることがわかる。次に、日本語のトークショーは、1997年の5月11日に日本テレビで放映された「おしゃれカンケイ」からの一節を引用する。ホストの古館伊知郎（F）とゲストの前園真聖（M、プロサッカー選手）の会話で、Mがアルゼンチンで耳にピアスをしたときの経験をFに話している場面である。会話の下の点線部分はMがFにアイコンタクトをしている部分である。

M：で、その：(0.5) マラドーナって選手が生まれた国で

!----!

F：えー。

!----!

M：ワイルドだったんですけどすごく

!-----!

F：えー。

!----!

M：で、バーンでやられたときに：すごい痛くて＝

!-----!

F：＝痛くて

!-----!

MはFにそれぞれの会話の終わりの部分でアイコンタクトを取るのみである。この日米のトークショーのデータから、アイコンタクトの時間は、アメリカ人同士の会話の方が、日本人同士の会話よりもかなり長いことがわかった。

3 ジェスチャー

非言語コミュニケーションの中で、多くの人が真っ先に思いつくのがこのジェスチャーであろう。ジェスチャーとは、「意図的に行うノンバーバルな身体動作」である（『異文化コミュニケーションワークブック』89ページ）。筆者の留学経験では、顔の表情同様ジェスチャーも、日本人はおとなしく、欧米人はオーバーであるという印象を持っている。ここでは、アメリカだけでなく、できるだけ多くの言語共同体におけるジェスチャーを取り上げて比較してみたい。その前にまず、『異文化コミュニケーションワークブック』89-90ページにしたがって、ジェスチャーを三つに分類する。

- 1) 表象（エンブレム）：意識的に使われ、同一文化圏では、共通の意味を持つ身体動作。しかし、異なる文化間では、別の動作になることもある。

(例) お金 欧米では、親指とそれ以外の指をすり合わせる（お札を数える動作）。

日本では、親指と人差し指で輪を作る（硬貨を表す）。

2) 例示動作（イラストレーター）：たいていの言葉とともに使われ、意味を強調したり、描写したりする。

(例) 「こーんな、大きな魚だったよ」と両手を広げる。

3) 調整（レギュレーター）：相手の行動を調整したり、制御したりする。

(例) 視線，うなずき，あいづち

次に、ヴントによる三つの分類を以下に挙げる（『言語学大辞典 術語編』1055ページ）。

- a) 指示的身振り：最も原始的なもので、視野にある対象物を示して、その対象に注意を惹きつける目的を果たしている（「私」「これ」などをさす身振り）。また、もう少し高次のものとして目前に存在しないものを指示することもできる（口唇や頬をさすことによって「赤」を表現するなど）
- b) 叙述的身振り：空中に屋根と壁の輪郭を描いて「家」を示したり（模写身振り）、ネクタイを締める身振りで「男」を表す（特徴記述的身振り）などである。
- c) 象徴的身振り：頭の上に人差し指を立てて「怒り」を表したり、人差し指をカギのように曲げることで「盗み」を意味するなど、抽象概念を表す身振りである。前二者の身振りに対して、身振り（記号表現）と意味（記号内容）との結びつきが恣意的（約束的）である。つまり、文化差が大きく、ときには誤解を生じさせる原因となっている。

これらは人間の発展過程を考慮した分類で、a) が最も原始的、c) が最も高次のものである。この中で、文化差が大きく、誤解を生じる原因となるc) を特に取り上げてみよう。まず、日本人のするジェスチャーを通じやすいものと通じにくいものに分類し、次に同じ型のジェスチャーでも文化によって意味の異なるものを挙げ、最後に相手の感情を害するタブージェスチャーを取り上げる。

3. 1 通じやすいジェスチャーと通じにくいジェスチャー

通じやすいジェスチャー（世界のどこでも使える）

- ① Vサイン：Victory（勝利）の頭文字Vを取ったサインで「勝利」を意味する。1941年、ヴィクトール・ド・ラブレーという名のベルギーの法律家によって考え出され、戦中戦後、チャーチルが公に使い始めてから世界に広まった（『ボディートーク 世界の身振り辞典』133ページ）。
- ② 片手の人差し指を立て、口もとに近づける：「静かに」の意味。世界中どこでも通じる。
- ③ 親指と人差し指であごをつかむ：「考える」動作を表す。
- ④ 人差し指と中指を口の前で動かし、もう一方の手を下から添える：「食べる」動作。

（②，③，④がほぼ万国共通であることは、『世界20カ国ノンバーバル辞典』による。）

通じにくいジェスチャー（『異文化コミュニケーションワークブック』87ページより）

これらは日本でしか通じない。海外では使っても通じないので注意。

- ① お猪口を持つしぐさ：「一杯，どう？」の意味。欧米では、日本酒のお猪口ではなく、ビールのグラスであるため、手の形はもっと大きなグラスを持っている形になる。
- ② 顔の前で片手で（あるいは両手を合わせて）拝む：「お願い」の意味。欧米では両手を合わせるのは神様に祈るジェスチャー。ただし、この場合両手の指はしっかり組まれ、位置も胸の前に来る。
- ③ 両手首を交差させる：「ダメ」，「バツ！」の意味。否定を表すジェスチャーとしては「頭を左右に振る」「頭を左右に振りながら手のひらを相手側に向けて左右に振る」などがある。
- ④ 手のひらを下に向けて動かす：「おいで」の意味。欧米で人を招くジェスチャーは、手のひらを上に向けて、親指以外の四本の指を自分のほうに二，三回動かす。手のひらを相手に向けて、親指以外の四本の指を上下に振る欧米の「さよなら」のジェスチャーと間違われない

よう注意。

- ⑤ 小指を立てる：「恋人」，「彼女」の意味。

3. 2 同じ型のジェスチャーでも文化によって異なるもの

これらも誤解を招く恐れがあるので，注意を要する。

- ① 人差し指と親指で輪を作る：日本では「お金」，アメリカでは「OK」，フランスでは「ゼロ」，ブラジルでは「卑猥」。
- ② 手の平を下に向けて動かす：日本では「おいで」，アメリカでは「さようなら」。
- ③ 小指を立てる：日本では「恋人」，アメリカでは「女々しい男」，インド，スリランカでは「トイレに行きたい」。
- ④ 手を胸に当てる：日本では「ほっとする」，アメリカでは「誓う」。
- ⑤ 人差し指で目の下を触る：日本では「アッカンベー」，フランスでは「うそ」「用心しろ」，アメリカでは「くそくらえ」，オーストラリアでは性的誘惑。

3. 3 タブージェスチャー

3. 2と重なるものもあるが，ここでまとめて示す（①から⑥は『世界20カ国ノンバーバル辞典』より）。これらをうっかりするとトラブルに巻き込まれかねないので，注意を要するジェスチャーである。

- ① 人差し指と親指で輪を作る：ブラジルでは「卑猥」。
- ② 人差し指で目の下を触る：アメリカでは「くそくらえ」，オーストラリアでは「性的誘惑」。
- ③ 中指を立てる：「くそったれ」。
- ④ 人差し指であいてを指す：「威嚇」
- ⑤ 手の平でこぶしをたたく：マレーシア，シンガポールでは「くそったれ」。
- ⑥ 手を垂直にして親指を鼻につける：「くそくらえ」。
- ⑦ 頭をなでる：タイやマレーシアなどでは，頭が身体の中でも最も神聖な場所と考えられているために，そこに触れることは神への侮辱と考え

られ、タブーとされている（『日米ボディートーク』113ページ）。

4 タッチング（接触）

欧米では、挨拶として握手したり、抱き合ったり、接吻し合ったりする光景がよく見られる。これは、欧米ではタッチングによるコミュニケーションが社会習慣的に認められているからである。一方日本では、挨拶としての握手や抱擁や接吻はあまり一般的ではなく、挨拶はふつう、軽い会釈やお辞儀で行う。タッチングには、相手の肩をたたいて激励したり、親が子供の頭をなでたり、野球でホームラン打った選手が他のナインとハイタッチするなど、さまざまな種類があるが、ここでは、握手について絞って考察する。英語圏の国では、標準的に次の五種類の握手の型がある（『しぐさの比較文化』9-20ページ）。

堅実型握手：男性同士の場合、堅実型握手は、開いた手を差し出して親指の付け根同士が合う所まで相手の手を手中いっぱい包み、テニスのラケットを水平に握るような感じでしっかり握りしめ、上下に二、三回振る。そしてサッと手を引く。この型の握手は、自尊心と同時に相手への尊敬の念を表す重要な指標と考えられている。この標準的握手に比べると、他の握手は過ぎたるもの、または及ばざるものと感じられる。

強烈型握手：強烈型握手はその名の通り、強がり屋や腕っぶり自慢など、攻撃的・威圧的・挑戦的な人物の握手である。

指触型握手：指触型握手は手の平を開き切らずに指を差し出すだけで、親指の付け根を合わすことをしない。これは英国圏では握手の拒否と見なされる。

無力型握手：無力型握手は一番よくない握手である。これは力の抜けた手を握手の位置へ持っていき、相手はそのプランとした手を握るに任せるやり方である。相手はすぐに何かを盗まれて損をしたような気持ちになる。指触型握手よりもまだ悪いこの握手は、握手の拒否だけでなく、取るだけ取ってお返しはしたくないことを表す。相互性も平等性もなく、社交上の自滅行為である。

過剰型握手：過剰型握手は新密度過剰で長たらしく誠意に溢れすぎて、明らかに過ぎたる握手であるため、かえって不誠実に感じられる。

アメリカ人と握手をしたとき、留学当初は非常に強く握るので、強烈型に近い印象を持ったが、次第にこちらも強めに握るように努力していった経験がある。アメリカ人にとって、これは堅実型握手である。伝統的に接触なしの挨拶をする日本人のする、礼儀正しく慎ましやかな握手は、無力型握手と受け取られてしまう危険性がある。日本人にとっては、やや強めに物怖じせずに握り返すくらいの姿勢が必要であろう。

イスラム教では、左手は不浄とされているので、握手するときも、ものを渡したり受け取ったりするときも右手を使うことを頭に入れておくべきである。

5 空間（対人距離，方向）

人と人がコミュニケーションしているときの二人の間の距離を対人距離という。ホールはアメリカ人の対人距離研究した結果、対人距離を密接距離（0～45cm）、個体距離（45cm～122cm）、社会距離（122cm～366cm）、公衆距離（366cm～762cm）の4つに分類している。以下にそれぞれを解説する（『異文化コミュニケーションワークブック』95-96ページより）

密接距離：恋人，親と用事のような非常に親しい間柄の距離。タッチングによるコミュニケーションが多い距離。感情を伝達するにはよい距離だが，理論的な話には向かない。

個体距離：友人と個人的なことを話しているときの距離。リラックスでき，声も普通の高さ。たいてい2人でコミュニケーションが行われ，他人が割り込みにくい雰囲気を作る。親しい会話ができる距離。

社会距離：机を囲んで座りミーティングをしているときの距離。会話のしやすい社交的な距離。声は個体距離のときよりやや大きめで高めになる。

公衆距離：講演者と聴衆の間の距離。大教室での先生と生徒の間の距離。この距離では会話は成り立たない。話者は丁寧なことばを用い，あらかじめ考えて準備した事柄を話す。

アラブ系の人には個体距離がアメリカ人や日本人よりも短いので、近づいて話す。近づかれたほうは相手があつかましく不快に感じる。ところが、アラブ人からすると近づかない人は冷たいとか逃げ腰だという印象を持ってしまふ。

また、日本人と英語国民では、日本人は距離を縮めようとする傾向があり、英語国民は距離を保とうとする傾向がある。したがって、英国国民の保とうとする距離が日本人に非友好的で不満な感じを与えることも多い(『しぐさの比較文化』43ページ)。筆者がアメリカ留学中、アメリカ人は人とすれ違うときなど、相手との距離が近づくと必ず Excuse me と言っていた。また、アメリカ人のうしろを歩いていると、後ろに目が付いているかのように、ドアをあけてくれたりした。アメリカ人はこのように、至近距離の人に対して非常に敏感である。アメリカ社会にはさまざまな国籍の人が入り混じって住んでおり、まわりの人に対する情報が少ない。そのような低文脈の環境にあって、見知らぬ人に対する警戒心が強いので、まわりに対して気を配ることになるのである。逆に日本人は、至近距離の人に対して鈍感で、多少触れ合っても互いに何とも言わない。よっぽど強くぶつかったりしたときは「すみません」と誤るが。これは、日本は高文脈の国で、まわりはみな自分と同じ日本人であるという安心感があるからであろう。

アメリカではまた、距離を表すのに、信号から信号までを1ブロックとして、1ブロック、2ブロックのように表す習慣がある。

最後に、方向については、一般的には東西南北で示される。しかし、ハワイのオアフ島では、真ん中に山があり、端に海があるという地形なので、「山側 (mauka)」「海側 (makai)」という語を使って方向を示す。

6 時間の使い方

日本は時間厳守の国で、バス、列車、飛行機、船も時刻表どおりぴったり動くのが普通である。一方、英語圏では乗り物がかなり遅れることがある。社交的な集まりにも、几帳面な日本人は定刻よりも早めにつくことが多いが、英語圏では、遅れることもしばしばある(『しぐさの比較文化』279ページよ

り)。

アメリカにいたとき、大学教授との面接の時間、病院での診療の時間など、時間が厳格で、ぴったりはじまってぴったり終わり、遅れたり延長したりということはあまりなかった。このようにビジネスにおいては、アメリカ人は時間に非常に厳格であった。アメリカ人はまた、ある程度会話をすると、I will be right back (すぐに戻るよ) と言ってすぐに行ってしまうときが多かった。一所にとどまらない忙しい人種であるという印象を受けたが、Time is money (時は金なり) という習慣が身についているのであろう。しかし、せわしないアメリカ人が、店などで自分の順番を待つときは、みな気長に待っている。はじめは不思議な気がしたが、自分の順番を待つことも面接と同じく社会の約束であって、それを守るのはあたりまえという考えをアメリカ人は持っていると思われる。

次に、会話における沈黙(間)の時間を、日本とアメリカで比べてみよう。2で示したアメリカのトークショーをもう一回以下に掲げる。

B: Um, (0.3) two kids (gesture), (0.2) my mother's best friend (gesture) [

J: Yeah (small voice).

B: she had two little kids (gesture), same age as my sister and I (gesture), (0.1) and one Christmas, THEy snuck (gesture) and THEy looked (gesture) at their presents and they didn't wrap (gesture) and *back* (0.1) up too tight (gesture).

J: Right.

B: And their mother found out and she took (0.1) all their presents (gesture) back and they had NO presents (gesture) [

J: Oh, come O:::n. Oh that seems like awful to ME::.

A: (sighing)

B: So, you know what I did (gesture). (0.2) The next year when I did it (gesture), I made sure I put it back *right*. (gesture, laughter)

()内が沈黙の時間(単位は秒)である。それぞれ非常に短いことがわかる。一方、日本のトークショーは、2で引用したところの少し前の部分を挙

げる。

M：その人が (0.3) あの:: (1.0) ず::っとピアスしてて左 [耳に

F：うんうん

M：でその影響で

F：うん

M：あの：(0.3) 留学してたんですよぼくアルゼンチン

(0.3), (1.0)など、かなり長い間があることがわかる。このように、アメリカ人の会話は日本人の会話に比べて間が短い理由について、Reisman (1974: 112ページ) は「アメリカ人には、会話において沈黙は埋めなければならないという社会的ルールがある」から、と述べている。

7 服装

服装は体を覆うもので、体を使ったジェスチャーなどのコミュニケーションほど直接ではないが、自ら進んで着るものであるから、着る人の表現意図が反映される。この点で、りっぱなコミュニケーションといえるので、取り上げてみよう。まず、服の色であるが、藤本 (1998) のいう「日本人は中間色が好きであり、欧米人は原色好みである」(104ページ) は当たっているように思われる。

色については、お菓子を比べてみても、特に日米で違いが現れる。アメリカのお菓子は色鮮やかなものが多い。一方日本のお菓子は地味な色合いのものが多い。食べてみても、アメリカのお菓子は甘い、酸っぱいがはっきりしている。一方日本のお菓子はほのかな甘さを感じるものが多い。アメリカのお菓子の色や味がはっきりしているのは、アメリカ人のイエスカノーか、はっきりした性格を現している。一方日本のお菓子の色や味がおとなしいのは、日本人の控えめな性格を現している。

服装にもどるが、日本人の和服、韓国人のチマチョゴリなどはどちらも晴れ着で、身なりがきちんとしている。ハワイでは、女性はムームー、男性はアロハシャツが正装で、暑い気候を反映して風通しのよい服装である。最近日本でも、暑い夏には、ネクタイをはずしてポロシャツで仕事をするクール

ビズが少しずつ定着しつつあるが、背広にネクタイの服装で仕事をする人も多い。一方アメリカでは、会社で働く人もTシャツなどくだけた服装をしている人が多い。一方イスラム圏では、肌の露出は禁じられており、特に女性は外出時には顔もベールで包んで歩く。

8 おわりに

以上、今回はさまざまな非言語コミュニケーションについて、異なる言語共同体でどのように異なるのかを概観した。筆者の経験から、顔の表情、アイコンタクト、空間・時間の使い方、服装など、特にアメリカとの比較が中心になった。以下に、日米の非言語コミュニケーションの違いを項目別にまとめる。

項目	日	米
顔の表情	あいまい、乏しい	豊か、オーバー
アイコンタクト	そらす傾向がある	しっかり見る
ジェスチャー	おとなしい	オーバー
タッチング①握手	無力型握手	堅実型握手
②挨拶	接触しない（おじぎ、会釈）	接触する（抱擁、接吻）
空間	距離を縮める傾向 至近距離の人に鈍感	距離を保つ傾向 至近距離の人に敏感
時間 ①ビジネス	厳格	非常に厳格
②パーティー	比較的厳格	比較的緩やか
③会話の沈黙	長い	短い
服装 ①色	中間色	原色
②仕事	比較的きちっとしている	比較的くだけている

しかし、ジェスチャーについては、比較的広く、世界のジェスチャーを比べることができた。今後はさらにさまざまな文献にあたったり世界を旅行したりしながら、世界のさまざまな言語共同体における非言語コミュニケーションの違いを明らかにしていきたい。

日米のトークショーの会話表記に用いられた記号

記号例	意味
0.1	ポーズ。単位は秒
[はじめの会話に後の会話が重なり合うはじめの部分
but	アクセント
emPLOYee	強いアクセント
あつい	強いアクセント
::	長音
=	はじめの会話に後の会話が間髪を入れず続く

参考文献

- 『異文化コミュニケーションワークブック』八代京子／荒木晶子／樋口容視子／山本志都／
コミサロフ喜美共著 2001年 三修社
- 『異文化理解とコミュニケーション』本名信行／秋山高二／竹下裕子／ベイツ・ホッフア共
著 1994年 三修社
- 『言語学大辞典 第6巻 術語編』1996年 三省堂
- 『しぐさの比較文化 ジェスチャーの日英比較』リージャー・プロズナハン著 岡田妙・斎
藤紀代子訳 1988年 大修館
- 『世界20カ国ノンバーバル辞典』金山宣夫 1983年 研究社
- 『日米ボディートーク 身ぶり・表情・しぐさの辞典』東山安子／ローラ・フォード編著
2003年 三省堂
- 『ボディートーク 世界の身ぶり辞典』デズモンド・モリス著 東山安子訳 1999年 三省
堂
- 藤本敏行「日米における非言語コミュニケーション」甲南大学紀要 文学編104 1998年3
月 95-111ページ
- Bauman, Richard & Joel, Sherzer eds. 1974. Explorations in ethnography of speaking.
2nd edn. Cambridge: Press Syndicate of the University of Cambridge.
- Reisman, Karl. 1974. Contrapuntal conversations in a Antiguan village. In Bauman &
Sherzer 1974: 110-124.
- Schneider, Kurt and David, Martin. Just Talk. 2005: 54. Saitama: EFL Press.